

〔国 語〕

○ 実施時間 ①グループ【15:00～15:40】(40分)

②グループ【15:30～16:10】(40分)

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は ～ 、12 ページまであります。
- (3) 答えはすべて解答用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて^{かんとく}監督の先生に合図しなさい。
- (7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていなさい。
- (8) 解答上の注意
 - ・ 字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や（）なども一字と数えること。なお、一マスには一字しか入れられません。
 - ・ 文末表現は、「こと」、「から」など、問いにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

□

次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① 船がギョコウに入る。
- ② 新鮮なヤサイを買う。
- ③ 足のキンニクをきたえる。
- ④ ジンヤクを使った実験をする。
- ⑤ 子供のカンビョウをする。

□

次のIの文章とIIの詩を読んで、後の問いに答えなさい。

I

① 人間的欲望の本質は「自由」である

人類の数万年におよぶ戦争の歴史は、つまるところ「自由」をめぐる戦いである。そう言ったのは、一九世紀ドイツの哲学者G・W・F・ヘーゲルである。飢えや渇き、恐怖、自尊心、信仰など、戦争が起こる理由はむろんさまざまにある。しかしその最も根本には、わたしたち人類の「生きたいように生きたい」という「自由」への欲望がある。そうヘーゲルは喝破した。だからこそ、人類はこれまで、戦争に敗れて支配されたり奴隷にされたりしても、長い目で見れば必ず「自由」のために戦ってきたのだ。そのことで、たとえ命を失うことがあったとしても、そしてそれゆえにこそ、人類はこれまで、何万年にもわたって戦争をなくすことができずにきたのだ。

この「自由をめぐる戦争」を、わたしたちはどうすれば終わらせることができるだろうか？
これは哲学における最も重要な問いの一つであったが、長い思想のリレーの末に見出されたその「答え」については、後で論じることにしたいと思う。

その前に、ここではまず、「自由」こそが人間にとっての最上の価値であるという、先に述べたテーゼについて明らかにしておこう。なぜ、わたしたちはそのように言い切ることができるのだろうか？
これについても、ヘーゲルのすぐれた洞察がある。

ヘーゲルは、人間精神の本質、言い換えれば人間的欲望の本質は「自由」であることを、きわめて鮮やかに描いてみせた。その論旨を、わたしなりに簡明に言い直すと次のようになる。

まず、わたしたちはさまざまな欲望を持ち、それを自覚している存在である。

動物も、むしろ欲望（本能）を持つてはいるだろうが、それを十分自覚しているようには見えない。彼らはおそらく、かなりの程度、その欲望（本能）のままに生きていくだけだ。

しかし人間は、複数の複雑な欲望を持ち、しかもそれを自覚している存在である。少なくとも、自らの欲望を自覚しうる存在である。それはつまり、わたしたちはこの欲望それ自体によって、つねに規定され——制限され——それゆえたえず何らかの i を自覚しているということである。

愛されたい、裕福になりたい、名声を得たい、認められたい、幸せになりたい……こうした人間的欲望は、わたしたちに否応なく ii 感を味わわせる。愛されたい、でも愛されない。認められたい、でも認められない……。わたしたちは、自らが欲望（を自覚した）存在であるがゆえにこそ、つねにすでに iii を感じずにはいられないのだ。

さらに言えば、これら複数の欲望は、しばしば互いに衝突する。人に好かれたい、でも自分を曲げたくはない。裕福になりたい、でも努力はしたくない……。複数性を持つ人間的欲望は、まさにそれ自体が、わたしたちを規定する——制限する——決定的な規定性なのである。

したがってヘーゲルは言う。このように、わたしたちが欲望存在であるというそのことのゆえに、わたしたちは必ず「自由」を欲するのだと。これら諸欲望を、達成するにせよ、あるいはなだめるにせよ、わたしたちは何らかの形で「自由」になりたいと必ず欲しているのだと。わたしたちが欲望存在であるということ自体が、人間的欲望の本質が「自由」であることを意味しているのだ。では「自由」とはいったい何か？

これまでの考察から、「自由」の本質を次のように言うことができるであろう。すなわち、わたしたちを規定する——制限する——欲望を自覚しつつも、なおこの規定性 A・B（を何らかの仕方こくまで克服し、そこから解放され、できるだけ納得して、さらにできるなら満足して、生きたいように生きられること、と。ヘーゲルの言葉を借りつつ概念化がいねんかするならば、③「諸規定性における選択・決定可能性の感度」）。これが「自由」の本質なのだ。あるいは、二〇世紀の哲学者ハンナ・アーレントの秀逸しゅういつな言い方

を借りて、「自由」は「我欲する」と「我なしうる」との一致いちちの感度が訪れる時、あるいはその可能性の感度が訪れる時に確信するものであると言ってもいいだろう。

さて、ここで注意が必要なのは、いまいみじくも「感度」という言葉を使ったように、「自由」の本質は「感度」（感じることとその度合い）であって「状態」ではないということだ。わたしたちは、どのような「状態」が自由な「状態」であるかを一意的に決定することはできない。何をもちて自由な状態とするかは、結局のところ人それぞれであるからだ。

裕福になったことで自由になったと思う人もいれば、裕福になったからこそ不自由になったと思う人もいるだろう。「職業選択の自由」があるから自由になれたと思う人もいれば、そのために、先述したように、どう生きればよいか分からないといった不自由を感じる人もいる。

つまりわたしたちは、何らかのあらかじめ決められた「自由な状態」に置かれた時ではなく、「ああ、いま自分は自由だ」という感度を得られている時にそれを「自由」であると確信するのだ。そしてその感度の本質こそ、「諸規定性における選択・決定可能性の感度」、換言すれば、「我欲する」と「我なしうる」の一致、あるいは一致の可能性の感度なのである。

以上を要するに、わたしたちはこう言ってしまうてよいだろう。

人間的欲望はさまざまにある。愛されたい欲、自己実現欲、権力欲、幸福欲……。欲望の「形態」は、このように無数にある。しかしわたしたちは、これら諸形態すべてを貫く欲望の本質を、「自由」への欲望と言ってしまうのだと。これらさまざまな形態を取る諸欲望の規定性を乗り越えることで、わたしたちは絶えず「自由」の感度を欲しているのだと。

以上が、人間的欲望の本質は「自由」であるということの意味である。

④ だれもが「自由」を欲する。人間にとって最上の価値は、まさに「自由」なのである。

「自由の相互承認」の原理

さて、ではこの最上の価値である「自由」を、わたしたちはどうすれば現実のものとすることができるだろうか。

ヘーゲルは言う。「生きたいように生きたい」という「自由」への欲望を抱えたわたしたちの前には、絶えず「他者」が立ちはだかっている。この「他者」は、わたしたちの「自由」を妨げる一つの決定的な「規定性」である。それゆえわたしたちは、自らの「自由」を実現するために、この他者からの「承認」を何らかの形で求めるほかないのだと。

歴史的に見れば、それはまず「承認のための生死を賭した戦い」の形を取るとヘーゲルは言う。

⑥ この戦いを通して、人類は主人と奴隷に分かれることになる。しかし先述した通り、たとえ命を失うことがあつたとしても、これまで人類は、「自由」を奪われたならその「自由」を奪い返すために必ず戦ってきた。そしてそのために、人類は長らく戦争をなくすことができずにきたのだ。

ではわたしたちは、どうすれば「承認のための戦い」を終わらせ、自らの「自由」を十全に確保することができるだろうか？

その考え方は一つしかない。そうヘーゲルは言う。互いが互いに対等に「自由」な存在であることを認め合い、そのことを根本ルールとした社会を作ること。すなわち、「自由の相互承認」に基づく社会を築くことによつて。

もしもわたしたちが、「自由」に、そして **C** に生きたいと願うならば、その限りにおいて、わたしたちは「自由の相互承認」を根本ルールとした社会を作るほかに道はないのだ。

(トマス 苦野一徳 「自由な社会」を先に進める『自由の危機——息苦しさの正体』集英社より)

注1 喝破……物事を見抜いてはつきり言うこと。

注2 テーゼ……ある問題について提出された命題。

注3 賭した……賭けた。

II

ちがう人間ですよ

長谷川龍生

ぼくがあなたと

親しく話をしているとき

ぼく自身は あなた自身と

まったく ちがう人間ですよと

始めから終りまで

主張しているのです

あなたがぼくを理解したとき

あなたがぼくを確認し

あなたと ぼくが相互に

大きく重なりながら離れようとしているのです

言語というものは

まったく ちがう人間ですよと

始めから終りまで

主張しあっているのです

同じ言語を話しても

ちがう人間だということを

忘れたばかりに恐怖がおこるのです

ぼくは 隣人とは

決して 目的はちがうのです

同じ居住地に籍を置いていても

人間がちがうのですよと

言語は主張しているのです

どうして 共同墓地の **C** を求めるのですか

言語は おうむがえしの思想ではなく

言語の背後にあるちがいを認めることです

ぼくはあなたと

ときどき話をしています

べつな 人間で在ることを主張しているのです

それが判れば

殺意は おこらないのです

『直感の抱擁』思潮社より

問1 — ①とありますが、ヘーゲルがこのように考える理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人類が数万年にわたって争いを続けているのは、地球で最も知性の優れた者を決めたいという人類共通の欲望があるから。

イ 「自由」のために戦うということは、神に対する信仰心をあらわす上で決して欠かせない行為だから。

ウ 飢えや渇きによる被害を数万年にわたって経験してきた人類は、飢えや渇きから「自由」になることだけを望んできたから。

エ 「自由」を求める戦争を自らすすんで起こすことで、生存能力の低い人類は他の生物に対抗してきたから。

オ 戦争が起こる原因の根底には、「生きたいように生きたい」という人類の「自由」への欲望があるから。

問2 i iii には、共通する三字の言葉が入ります。入る言葉を **I** の文章中からぬき出して答えなさい。

問3 — ②「欲望存在」とは、どのような存在ですか。最も分かりやすく述べられている部分を二十二字で探し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問4 A・Bに入る言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい（順不同）。

ア 収集 イ 限界 ウ 解放 エ 開放 オ 制限 カ 回収

問5 — ③について、関口君と目白君という二人の生徒が話し合っています。次の会話文中の a c にあてはまる言葉を、それぞれ二文字で I の文章中からぬき出して答えなさい。

関口 「難しい言葉が並んでいるね。どういう意味なのか、さっぱりわからないよ。」

目白 「難しい言葉に惑わまどされしないで。筆者は分かりやすく説明してくれているのだから、一緒に確認たしやんしよう。」

関口 「そうだね。わかったよ。」

目白 「筆者は、『自由』の本質は『 a b c 』であると述べているね。つまり、感じるごととその度合いによって、『自由』であるかどうかが決まるということだ。」

関口 「なぜ、そのように言えるのだろうか？」

目白 「だって、何を『自由』な a とするかは、人によって異なるわけだろう。だから、『自由』は個人の b で決まるというわけだ。」

関口 「なるほどね。」

目白 「人間は、『いまこの瞬間しゅんかん、自分は間違まちがいなく c になっているぞ』、あるいは『 c になれるぞ』という感覚を得られている時に、『 c 』を確かに感じているというわけだね。」

関口 「ふむふむ。よく分かったよ。ありがとう。」

問6 — ④とありますが、人間にとって「自由」が「最上の価値」をもつのはなぜだと筆者は考えていますか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 人間のあらゆる欲望の本質は「自由」への欲望であり、その意味で人間だれもが絶えず「自由」を欲していると言えるから。

イ 人間にとっての「自由」とは、金銭に換算かんざんするとしてもない金額に相当するものだから。

ウ ささまざまな制約がある現実の世界では、「自由」は一部の人間しか追い求めることのできない貴重なものだから。

エ 人間社会における「自由」とは、社会的に高い地位にある者しか感じられないものだから。

オ 数ある人間の欲望の中でも、「自由」に対する欲望だけが人間の人格を優れたものにするから。

問7 — ⑤とありますが、「自由」を実現させるためにはどのような社会が必要だと述べられていますか。最も具体的に述べられている部分を四十字以上四十五字以内で採し、はじめと終わりの五字を答えなさい。

問8 — ⑥について、以下のように【ノート】にまとめました。【ノート】中の□ XとZにあてはまる言葉を、それぞれ指定された字数で6ページの文章中からぬき出して答えなさい。

【ノート】

わたしたちはみな、「生きたいように生きたい」という「自由」への欲望を抱いている。

← (しかし)

そこでは必ず「X (二字)」があらわれ、わたしたちの望む「自由」を妨げようとする。

← (そこで)

わたしたちは自らの「自由」を実現するために、「X (二字)」から認められること、「Y (二字)」を求めようとする。

← (そのため)

人類は生命を賭して「Z (八字)」をしてきた。

□ Z (八字)

□ X (二字)

□ Y (二字)

□ X (二字)

□ Y (二字)

□ Z (八字)

問9 □ Iの文章と□ IIの詩の中の□ Cに共通して入る言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 過激

イ 不和

ウ 明暗

エ 平和

オ 複雑

このページに設問はありません